

ふるさとわかちづくり

加納町自治区

「加納町」の概要

加納町自治区は、四郷町から国道419号線で途中、亀首町より分岐し県道深見亀首線を北進、伊保町からは市道中切金山線を北進した、猿投山の裾野の一角に位置している、面積5.51km²の集落です。

「加納町」の由来

この地に人が住み着いたのは、この地から打製石器の尖頭器が出土採集されていること、近辺には大規模な池田一号墳及び藤山一号墳が築造されていたことから日本のあけぼのの時代を同じくして、猿投山麓を中心に美濃の山地、三河高原の山地を舞台に尾根伝いに駆け巡っていた狩人たちが、やがて籠川と加納川の合流地周辺で農耕を始め定着したと考えられています。また、この地は天領地であったようです。

加納町の地名のいわれは2説あり、後醍醐天皇の頃（鎌倉時代末期～南北朝時代初期）足助次郎と共に天事に奔走した加納孫郎某という武士が北条家との戦いに破れた後、諸所を流浪しこの地に来て土着、豪農と成り、この氏の姓、加納を取って「加納の郷」と呼ばれるようになったという説と、6世紀の頃、この地は猿投神社領で、平安朝以前は開墾を目的として土地を開拓する場合の無税地を加納と呼び、神社の御料地として開拓されたこの地をこれより「加納の郷」と称するようになったという説があります。

観光の名所 さなげ温泉

加納町一ノ井に天神を祀る小さな祠があり、ここから鉱泉が湧き出ていたと言われていいます。古来この天神社の湧泉を利用し衆人が入浴



していたと思われます。この小祠の主神は小彦名命と云われ出雲大国主命と兄弟の契りを結んだ神で大国主命が病に伏した時、道後温泉の湯を運び浴させ病を回復させたそうです。以後小彦名命と出雲大国主命は温泉の神として信仰されています。この近辺には、神田、宝田、元薬師、垣之内など神祇等にかかわる小字名が今も残されています。

時を経て、この鉱泉は昭和40年代に至り猿投温泉として、近在の人達のための湯治場として岩風呂が開設、本格創業が始まり、賑わいを見せるとともに、昭和61年12月に宿泊施設「金泉閣」が新築されて以来、年間来客約35万人の入浴客が当地を訪れ猿投山山麓の四季を満喫され、憩いの山里として少しずつ変貌しています。

新たな取組み「まちづくり推進部」

新たな取り組みとして、平成14年度に加納町まちづくり推進部を発足しました。「安心安全、のどかさのある豊かな住環境の形成および町内の名所旧跡の保存伝承」を目標に籠川、加納川沿いに桜、もみじ等の植栽および枯れ苗補栽、薬師堂銘木の枝垂桜保護活動を第一歩として区民活動として歩み出しました。

平成17年度から豊田市わくわく事業に応募し、「色めく藤山を育てよう・好んで藤山に集う公園の創設」を合言葉に藤山に桜、もみじ等を植栽した散策路の整備および2.5ha程の景観豊かな地形を生かした練習、2ホールを



藤山コース 開所式

含む全20ホールを有する中部地方随一のマレットゴルフコースの整備を手がけ、平成19年9月15日多くの区民が集いコース開所式を行ったところである。春は桜、秋は紅葉を觀賞し、区民のふれあい交流拠点づくり「色めく藤山公園」を目指し区民のふれあいまちづくり活動は継続的に行なわれています。

今後の課題

自治区課題は、大きく次の2点です。

- 「自治区区内の道路整備」
- 「加納川の改修事業」

交通危険箇所を含め道路整備必要箇所の早期着工を関係機関へ強力に働きかけ「安全なまちづくり」を区民と共に積極的につくり上げていきたいと願っています。

加納町自治区データ

(H19.4 現在)

設立：昭和42年
世帯数：201世帯
：172世帯（昭和51年）
組数：14組
面積：5.51km²
自治区たより：「はばたけ加納」
回覧：月1回
ちびっ子広場：1箇所
ふれあい広場：1箇所
防犯灯設置箇所：56箇所
小学校：加納小学校区
自治区会館：加納町公民館